アルフレド・サンソル作・演出『すべてのスペイン人を飲み込んだバル』 © Luz Soria / CDN

［スペイン］

簡素な舞台で言葉、リズム、沈黙が織りなす人間模様

岡本 淳子

2021年10月4日、マドリードの劇場は定員の100%の観客を入れることを許可された。ようやく正常に戻ったと言えるであろう。とは言っても、コロナ禍での劇場封鎖や入場者制限などによる経済的打撃がその後も尾を引いていることは否めない。筆者は2020年3月にスペインへの出張をキャンセルしてから今に至るまで渡西できていない。そこで今回はスペイン人の友人のお勧めとネット情報を基にしてこの原稿を書いている。気づいたのは、現在のスペイン演劇界を牽引する中堅の劇作家・演出家が活躍しているということである。それはもしかしたら、すでに名声を得ている演劇関係者のみがこのコロナ禍を生き延びることができたということなのかもしれない。もう一つ気づいたのは、舞台美術が簡素な作品が多く、セリフの内容や役者の演技あるいは歌で観客を魅了していることである。パンデミックの後遺症で

低予算の舞台にすることを余儀なくされるも、それが劇作家や役者の力量を上げ、質の高い演劇を生み出しているとするなら、それは素晴らしいことではないだろうか。

アイデンティティの追求と選択の自由

アルフレド・サンソル（Alfredo Sanzol、1972～）作・演出の『すべてのスペイン人を飲み込んだバル（El bar que se tragó a todos los españoles）』が面白い。33歳の主人公ホルへは父親の言うなりに神父になったが、その人生に疑問を抱く。1963年、ホルへは人生を変えることを決意し、聖職免除許可書を申請した後、許可が下りるのを待たずに、マーケティングを勉強するために米国のテキサス州に渡る。右も左もわからないホルへはとりあえずスペイン人の経営するバルに行く。そこでの出会いと縁が彼を新たな旅にいざなう。映画でいうならロード・ムービーの始まりである。マーケティング関連のベスト・セラー作家に会いにカリフォルニアに行き、その地のスペイン・バルで運命の女性カルメンと出会い、結婚を決意する。聖職免除許可書の手続きがなかなか進まないためスペインに戻ったり、直談判をしにバチカンに行ったりもする。行く先々で立ち寄るバルでの出会いがホルへに力を与え、前進させる。スペイン人にとってバルは飲食するだけの場所ではない。人間関係を育む文化的な場なのである。バルで出会う多くの人との交流がホルへの人生を豊かにしていく。パンデミックによりバルで友人と語らう自由さえ奪われる経験をした観客はバルの場面に感動すら覚えるだろう。本作には50人以上の人物が登場し、ホルへとカルメン役以外の役はその他の７人の俳優によって演じられるのだから驚きである。

主人公のモデルはサンソルの父親である。スペイン内戦やフランコの独裁制への言及もあるセリフからは父の困難な青春時代に思いをはせる息子の愛が伝わってくる。本作は、自分がどういう人間になりたいのかを決める自由、第二のチャンスをつかむ自由、そして誰かを愛する自由への賛歌である。2021年度のマックス賞（Premios Max）の最優秀作品賞、最優秀脚本賞（サンソル）、最優秀舞台美術賞（アレハンドロ・アンドゥーハル［Alejandro Andújar、1979～］）を受賞し、最優秀演出賞および最優秀男優賞にノミネートされたサンソルとフランセスコ・カリル（Francesco Carril、1986～）は次点であった（バリェ＝インクラン劇場［Teatro Valle-Inclán］、2021年２月12日～４月４日、その後、スペイン各地を巡演）。

1930年代のスペイン、働く女性の権利

劇作家、演出家、劇団ミコミコーン（Micomicón）の主宰者であるライラ・リポイ（Laila Ripoll、1964～）はこれまで『聖女ペルペトゥア（Santa Perpetua）』や『迷子になった子どもたち（Los niños perdidos）』などでスペイン内戦や独裁制のトラウマを舞台にのせてきた。

2019年にフェルナン・ゴメス劇場（Teatro Fernán Gómez）の芸術監督に就任した彼女が演出した『ティー・ルーム（Tea Rooms）』が大ヒットしている。この作品は、スペイン内戦や独裁制を直接的に扱ったこれまでのリポイ作品とは少し趣が異なるが、弱者に寄り添う姿勢は変わらない。ガルシア・ロルカと同じ27年世代の知識人だが、女性であるためか知名度が低いルイサ・カルネス（Luisa Carnés）の同名小説の舞台化で、1930年代のマドリードの中心部にあるティー・サロンで働く女性８人の物語である。

作家カルネスのオルター・エゴである人物マチルデの「人間は裏の階段を使う者と表のエレベーターを使う者に分類され、両者が交わることはない」という力強い独白で舞台が始まる。当時、労働組合は活発化したが、守られる労働者に女性は含まれない。貧しい労働者階級の女性である登場人物たちは二重の抑圧を受けているのだ。

小ホールに足を踏み入れた観客は、30年代のエレガントなティー・サロンのカウンター奥のスペースを登場人物たちと共有する。舞台転換はない。床は白と茶の市松模様、カウンターには食器類が、正面奥の大きなショーウインドーにはお菓子が並び、その向こうにマドリードの通りを通行人や路面電車が行き交う様子が映像で流される。アルトゥーロ・マルティン・ブルゴス（Arturo Martín Burgos、1961〜）によるこの舞台装置、そして女優６人の演技が絶賛されている。リポイによれば、あまり知られていない小説の翻案だったため、観

ルイサ・カルネス作、ライラ・リポイ台本・演出『ティー・ルーム』© marcosGpunto

客と批評家の双方から予想外の高評価を得ていることに驚いているという。チケットがすぐに完売したため、再演が決定した（フェルナン・ゴメス劇場ハルディエル・ポンセラ小ホール、2022年3月10日～4月24日初演、10月20日～11月6日再演）。

内戦勃発、その時芸術家たちは……

『見知らぬ地で（En tierra extraña）』は、音楽プロデューサーのホセ・マリア・カマラ（José María Cámara、1947～2021）の発案でフアン・カルロス・ルビオ（Juan Carlos Rubio、1963～）が台本と演出を手掛けたミュージカルである。歌姫コンチャ・ピケル（Concha Piquer、1906～1990）が作詞家ラファエル・デ・レオン（Rafael de León、1908～1982）を介して、実際には会うことはなかったフェデリコ・ガルシア・ロルカ（Federico García Lorca、1898～1936）と出会う、内戦の時代を生きた芸術家たちの奇跡の物語だ。

ルビオの2018年の作品『フェデリコ・ガルシア・ロルカの私書（La correspondencia personal de Federico García Lorca）』でロルカを演じたアレハンドロ・ベラ（Alejandro Vera、1979～）が今回もロルカを好演している。また、この作品で女優デビューを果たした歌手ディアナ・ナバロ（Diana Navarro、1978～）の歌声が素晴らしく、浅い演技経験をカバーして余りあると評論家たちは高く評価している。デ・レオンはピケルの大ヒット作『タトゥー』や『緑の瞳』の作詞家でありながら今では忘れ去られた存在である。彼が20世紀の音楽シーンで重要な人物であるだけでなく、人間的にもとても魅力的だったことをアベリノ・ピエダー（Avelino Piedad、年齢非公表）がうまく体現している。

この作品では、3人の偉大な芸術家の個人的な悩みが歌を交えて語られる。妻帯者である闘牛士の子を身ごもったピケル、同性愛者であるデ・レオンとロルカ。世間の風当たりは強いが、彼らにはそれを笑い飛ばす強さがある。

フアン・カルロス・ルビオ台本・演出『見知らぬ地で』 © Javier Naval

アイロニックで知的な会話と歌の絡みが絶妙だとの劇評もある。音楽監督はミュージカル『ゴースト』、『ボディーガード』、『キンキーブーツ』、ルビオのミュージカル作品『大ヒット（Grandes Éxitos）』（2018）

や映画『邪魔者（El inconveniente）』（2020）の音楽も手掛けたフリオ・アワッド（Julio Awad、1977〜）。これまでミュージカルというと輸入作品ばかりであったスペインで、オリジナルの優れたミュージカル製作が可能であることをこの『見知らぬ地で』が証明したと評されている（エスパニョール劇場［Teatro Español］メインホール、2021年11月11日〜2022年1月2日、その後、スペイン各地を巡演）。

沈黙が雄弁に語る

劇作家・演出家のフアン・マヨルガ（Juan Mayorga、1965〜）は2019年にスペイン王立アカデミーの会員になるという快挙を成し遂げた。入会スピーチのタイトルをマヨルガは「沈黙（Silencio）」とし、開口一番、大勢のアカデミー会員や招待客の前でスピーチをすることに関して「この状況は演劇的です」と言った。

この自身の経験を受けて、マヨルガが書き下ろしたのが『沈黙（Silencio）』だ。ある劇作家のアカデミー入会のスピーチの場面をある女優が演じるという、メタシアター的な一人芝居である。

主演のブランカ・ポルティーリョ（Blanca Portillo、1963〜）への称賛の声が止まない。彼女のことは、ペドロ・アルモドバル（Pedro Almodóvar、1949〜）の映画『ボルベール《帰郷》』（2006）の主人公の実家の隣人でがん患者のアグスティーナ役、『抱擁のかけら』

フアン・マヨルガ作・演出『沈黙』 © Javier Mantrana

（2009）の主人公ハリーを支えるジュディット役で覚えている方もいるであろう。舞台ではメディア、ハムレット、アンティゴネー、『人生は夢』のセヒスムンド、ブレヒトの肝っ玉おっ母など、どんな役でも見事にこなす名優だ。

マヨルガはスピーチで、演劇において“沈黙”がいかに雄弁であるかを、いくつかの演劇作品の名場面を挙げて示し、演劇においても実社会においても言葉を発するよりも沈黙が重要な時もあると語った。そしてこの舞台では、劇作家を演じる女優を演じるポルティーリョが、スピーチの途中に沈黙を入れながら、劇作家の緊張を見事に演じる。この戯曲を読むのは時間の無駄であろう。とにかく客席でポルティーリョの沈黙を肌で感じなければならない。そういう意味で、今回紹介した作品の中で一番観たい作品である。ある日の公演では、拍手とブラボーのスタンディング・オベーションが3分以上続いたという（エスパニョール劇場メインホール、2022年1月7日～2月11日、2022年10月にはパリ公演）。

負の過去に向き合うスペイン演劇

上記の作品に共通するテーマがスペイン内戦と独裁制である。『すべてのスペイン人を飲み込んだバル』ではフランコ批判がコミカルになされており、聖職者というフランコ時代の特権階級から脱して自由を求める主人公の旅そのものが独裁制批判と言える。『ティー・ルーム』で描かれる抑圧される女性もカトリック主義を強く推し進めたフランコ政権の犠牲者の象徴である。そして『見知らぬ地で』にはガルシア・ロルカというスペイン内戦の最も有名な犠牲者が登場する。舞台ではピケルがロルカを危機的状況から救おうとメキシコ行きのチケットを渡し亡命を促すが、ロルカは受け取りを拒否する。その後のロルカの悲劇は皆の知るところである。『沈黙』は内戦にも独裁制にも直接関係はない。しかし、マヨルガがアカデミー入会の場で「会長、会員の皆様、会場の皆様」とスピーチを始めるのに対して、ポルティーリョ演じる女優が演じる劇作家は「会長、会員の皆様、権力者の皆様、会場の皆様」と言っている。権威主義に対するマヨルガの姿勢が垣間見える。

地方発信の若い力

アンダルシア州の港町カディスを本拠地とする劇団カディスの女子たち（Las Niñas de Cádiz）の『荒れ狂う風（El viento es salvaje）』がマドリードで上演された。2020年のマックス賞の最優秀新人作品賞を受賞した作品である。「超愉快な悲喜劇」と称される本作にはフェドラとメディアという大親友が登場する。エウリピデスの作品に出てくる激情的な女性2人を思いきりコミカルに現代に生き返らせたのは若手の劇作家アナ・ロペス・セゴビア（Ana López Segovia、年齢非公表）で、演出と演者もしている。フェドラとメディアは姉妹の

ように仲がいいが、一人は生まれた時からずっと幸運に恵まれ、もう一人は不幸の連続。それでも二人の友情は揺るがなかった。しかし、それぞれの人生が180度変わったら、二人は新しい運命を受け入れられるだろうか？　セリフはソネットや８音節の10行詩などになっており、時にカディスの祭りで歌われるロマンセが入り、とにかくリズムがいい。そのセリフ回しと大げさな動きで４人の女子が終始観客を笑わせる。地方発信の若い劇団のさらなる活躍を期待する（第四の壁劇場［Sala de Teatro Cuarta Pared］、2022年４月28日～５月15日、10月にはガリシア州のビーゴで公演）。

アナ・ロペス・セゴビア作・演出・出演『荒れ狂う風』 © Isa Vicente

おかもと・じゅんこ

大阪大学大学院人文学研究科外国学専攻准教授。専門はスペイン現代演劇。『現代スペインの劇作家アントニオ・ブエロ・バリェホ――独裁政権下の劇作と抵抗』（2014）で第47回日本演劇学会河竹賞奨励賞受賞。『現代スペイン演劇選集Ⅱ，Ⅲ』、『21世紀のスペイン演劇①』に翻訳作品が収録されている。